

孔子のことば：現代語訳

＜人生の諸段階＞先生はおっしゃった。私は15歳になったとき、学問の道に志した。30歳になって、自分の立場を確立した。40歳では迷いがなくなり、50歳を迎えて、天から与えられた使命を自覚した。60歳になると、人のことばがすなおに理解できるようになった。70歳を迎えたいまでは、心の求めるままにふるまっても規範からはずれることがなくなった。

＜学問の方法＞先生はおっしゃった。師や書物に学んで知識を増やしても、自分で思考しなければ、まとまりがつかない。考えているだけで他から知識を学ばなければ、独りよがりになり陥って危険である。

＜君子と小人＞君子は、何をなすべきかを悟るが、小人はどうすれば得になるかを理解する。

＜神秘について＞先生は、怪異、異常な力、秩序の乱逆、鬼神については、語ることはなかった。

(注)「怪力」(不思議な力)と「乱神」(神秘現象)の二つとする説もある。

＜死後の靈魂＞季路(子路)が、親の靈魂や神の祭祀について尋ねた。先生はおっしゃった。「生きている親に十分仕えることができないのに、どうして死者の靈魂に仕えることができるか」。子路はさらに、死について尋ねた。先生はこうおっしゃった。「生の意味についてきちんと理解

できないでいるうちは、どうして死後の靈魂の意味を理解することができようか」。

＜仁—親愛の心＞樊遲が仁について質問した。先生はおっしゃった。「人を愛することだ」。

＜恕—思いやりの心＞子貢が尋ねた。「生涯行すべきことを、一言で表すとどうなるでしょうか」。先生はおっしゃった。「それは、思いやりである。自分にしてほしいことは、他人に対してもしないということだ」。



2 儒教の展開

▶ pp.68～71

四端の心：現代語訳

人はだれでも、他人の不幸を見ずごしにはできない同情心を持っているという、その理由はこうである。たとえば、よちよち歩きをする幼児が井戸に落ちかけているのを見かければ、だれでもハッと驚いて、何とかしなければという気持ちになる。これは、子供の親と懇意(こんい)になろうとか、村人や知り合いから誉(ほ)められようとする下心からのことではない。また、見ずごして非難されるのを恐れてのことでもない。このことから考えるに、他者をあわれみ同情する心を持たない者は、人間ではない。悪を恥じ憎む心を持たない者も、人間ではない。他

者と譲り合う心を持たない者も、人間ではない。善悪を判別する心を持たない者も、人間ではない。あわれみの心は、仁の端緒(たんしょ)である。悪事を恥じる心は、義の端緒である。他者に譲る心は、礼の端緒である。善悪を見分ける心は、智の端緒である。人がこの四つの徳の端緒となる心を具(そな)えていることは、人間が四肢を具えているようなものである。

荀子の性悪説

【原文】 人の性は悪にして其の善なる者は偽(ぎ)なり。今、人の性は生まれながらにして利を好むあり。是(こ)れに順(したが)う。故に争奪生じて辞讓亡(ほろ)ぶ。生まれながらにして疾悪(しつお)するあり。是れに順う。故に残賊生じて忠信亡ぶ。生まれながらにして耳目の欲の声色(せいしよく)を好むあり。是れに順う。故に淫乱生じて礼義文理亡ぶ。然(しか)らば則(すなわ)ち人の性に従い、人の情に順わば、必ず争奪に出て、犯文乱理(はんぶんらんり)に合いて暴に帰す。故に必將(かならず)師法の化と礼義の道あり。然る後に辞讓に出て文理に合いて治に帰す。此(こ)れを用てこれを観る。然らば則ち人の性の悪なること明らかなり。其の善なる者は偽なり。

(『荀子』第二十三「性悪篇」、金谷治編『諸子百家』中央公論社)